

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月10日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03039

研究課題名(和文) 戦時下の芸術専門教育 東京音楽学校の事例を中心に

研究課題名(英文) Art education under the wartime

研究代表者

橋本 久美子 (Hashimoto, Kumiko)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：70401495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：東京藝術大学では、第二次大戦中の教育や芸術活動についてこれまで体系的な検証が行われてこなかった。とくに昭和18年12月の「学徒出陣」で何人の学生が召集されたのか不明であった。本研究では当時の東京音楽学校の学生の入隊、その歴史的、教育的意味を問う。在学生49名の召集と、そのうち11名の戦没が判明した。他の戦没者についても調査継続している。

4名の戦没学生の楽譜が遺族から提供された。50曲ほどあり、2017年と2018年にシンポジウム2回、演奏会3回、資料展示5回、元学徒兵の講演1回を開催した。その演奏音源を後世に伝えるべく2019年4月、戦時音楽学生Webアーカイブズ「声聴館」を開設した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、東京音楽学校における「学徒出陣」について、在学中や入隊後について公文書、同窓会記録、関係者証言等を初めて体系的に蓄積することで、学校側と学生側双方から戦時期の実態解明を行った。旧帝大及び東京美術学校等との比較により同校の特色も明らかになった。戦没学生の楽譜については演奏し、彼らの音楽を後世に伝えるため、東京藝術大学音楽学部大学史史料室のウェブサイトに、戦時音楽学生Webアーカイブズ「声聴館」 <https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/> を開設した。楽譜、日記、音源、演奏映像等の公開により、学術的研究に利用され、海外からも演奏希望が寄せられている。

研究成果の概要(英文)：At Tokyo University of the Arts, there has been no systematic review of education and artistic activities during World War II. It was unclear, in particular, how many students were convened at the “Student Dispatch” in December, 1955. In this research, we enquire students of Tokyo Music School at that time, ask about their historical and educational significance. A total of 49 current students and 11 of them were killed. We are continuing investigations on other war dead. Scores of 4 killed students were provided by the bereaved. There were about 50 songs, and two symposia, three concerts, five material exhibitions, and one lecture of former student soldier were held in 2017 and 2018. In April 2019, the Wartime Music Student Web Archives “Seichokan (It means a kind of Music Hall to hear voice)” was opened in order to convey the sound source to the future.

研究分野：近現代日本音楽史

キーワード：東京音楽学校 アーカイブズ 学徒出陣 戦時下 戦没学生 音楽 教育 東京美術学校

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後 70 年を機に、全国の大学で戦時期を検証し「学徒出陣」に関する調査研究報告が行われたが、東京藝術大学では音楽・美術両学部とも大学としての体系的調査は行われていなかった。

(2) 美術学部では戦後 30 年頃から戦没画学生の作品を紹介するテレビ番組や作品展があり、遺族から作品の提供を受けて戦没画学生慰霊美術館「無言館」が開館した（1997）。こうした一連の調査に協力する必要も生じ、戦没学生の調査はある程度行われた。

(3) 音楽学部では戦争経験者個人が当時を語り、書物に記すことはあったが、公的記録に基づく調査は行われていなかった。戦没者についての記憶は、同級生の間でも曖昧になっていた。そうした折、戦後 70 年の新聞の報道特集やテレビの終戦特集で東京音楽学校の戦没学生 2 名がクローズアップされ、遺族から楽譜が提供され、急遽オープンキャンパスに演奏された。

(4) 近年の音楽学研究の傾向として、東京音楽学校に関連するテーマが徐々に増え、戦時中についても特定の人物や作品の研究が行われている。しかし戦時下の学生や学校と戦争といった事柄については、情報そのものが乏しく、テーマとしてもほとんど認識されてこなかった。

2. 研究の目的

(1) 近現代日本の音楽を明らかにするうえで、音楽取調掛及び東京音楽学校の歴史それ自体が解明の鍵となっている。しかし専門学校から新制大学へと転換した要因である戦時期については研究が遅れている。当時の音楽学校の教育や演奏活動について、大学百年史も主に学校側からの視点で記述されている。そこで本研究は、これまで看過されてきた学生側からの実態解明を目的とし、「学徒出陣」とその後の足跡を辿ることで、具体的な人数、個別の事例を記録に基づいて明らかにする。

(2) 学内文書により戦時下の在学中の記録を整理し、遺族から提供される史資料に基づき、彼らが戦時下の音楽学校に学んだ意味を検証する。

(3) 作曲された楽譜については、音符を判読し、書きつけられた複数の構想を精査し、彼らが創りたかった音楽に近づく。楽譜は清書されたものもあれば、複数のアイデアが書かれて最終的な音を読み取ることが難しいもの、スケッチ段階のもの、未完のものなど多様である。経年劣化した譜面の保存のため、デジタル化も行う。

(4) 楽譜を収集・保管するだけでは彼らの書きたかったものが感受、共有されないため、実際の演奏として蘇らせる。手稿譜のまま演奏できる楽譜についてはそれを用い、手稿譜では判読しにくい場合などは新たに浄書譜を作成する。

(5) 音楽学校関係者の調査と併せ、美術学校についても同様のリストを作成する。音楽学校では女子学生が過半数を占め、演奏活動にも国威発揚や慰問が日常的に行われていたが、美術学校は男子校で、国威発揚に不熱心さが目立ち、団体行動に馴染まないなど、両校は制度的には同じ官立専門学校であったが気質の点では対象的であった。学生数や入隊数といった具体的調査から両校の学生像にも迫りたい。

3. 研究の方法

(1) 記録調査 在学中に休学して召集された学生については、多くの大学では学籍簿の書き込み情報を基本史料とする。本学でも美術側はそれが揃っていたが、音楽側には戦時期の本科・師範科の学籍簿が保管されていない（選科のものはある）ため、入学書類、学期・学年の成績書類、卒業関係史料など該当年代の書類を悉皆調査した。応召により試験を受けず休学した記録も散見された。該当年代の在学学生全体のリストを作成し、入学年、本籍地、出身中学校、軍歴、入隊時期、生還情報、戦後の活動といった項目を用意した。

情報はインターネット、音楽人名録等からも収集した。音楽学校出身者は演奏や作曲の関係で、個人の名前で活動がみえる場合が比較的多い。それだけに情報が皆無であれば生還が疑わしい。

(2) 記録から見えること 調査によって少しずつ学徒出陣の実態が見えてきたが、その一方で、それまで疑問視していなかったところにあらたな要調査箇所も見えた。たとえば、昭和 18 年 11 月に出陣学徒仮卒業式が行われ、集合写真も残されている。だが、種々の記録をたどるうちに実際には入隊しなかった学生や、反対にそこに写っていても召集された学生もいたことが判明した。遺族からは、楽譜、手紙、写真、所持したノート、演奏旅行のスクラップなど多様な史料群が提供された。複数の学生の諸史料を併せることで、短い学生生活にも好きな音楽を勉強し、技術の習得に励み、切磋琢磨した日々のあった様子が浮かび上がる。

(3) 楽譜の状態 作品は作曲者の分身のような存在であり、手稿譜は、一つ一つ、音符の書き

方の癖や、その几帳面さといった特徴はもとより、楽譜を書きつける手ぶり、選ばれた歌詞などから、作曲者の脳裏に流れていた音楽を想像させる。その事例として、童謡詩人葛原しげるの次男、ピアノ専攻の葛原守作曲《かなしひものよ》、「夕焼け小焼け」の作曲家草川信の長男、作曲専攻の草川宏作曲《昭南島入城祝歌》をあげる。二人は仲の良い同級生であった。



【楽譜 1】葛原守《かなしひものよ》
(無題、タイトルは歌詞冒頭による)

【楽譜 2】草川宏《昭南島入城祝歌》冒頭
独唱・合唱とピアノの譜面に見えるが、
管絃楽の楽器名が書き込まれている

葛原の歌曲《かなしひものよ》(作曲年月日不明)は、「かなしひものよ、わかれとは」で始まる。哀しみを吐露する歌詞も自作と考えられている。譜面は薄くやや判読し難いが、演奏すべき音符は書かれている。葛原が音楽学校に入学して2年目に、軍人の兄が戦死した。一方、草川の《昭南島》は佐藤惣之助の詩に、独唱・合唱・管絃楽のためのカンタータとして構想された。当時の音楽学生が、先輩作曲家の活動やラジオの音楽放送に刺激を受け、作曲を通じて国民を激励することを使命と自覚していた事例である。詩の内容上、草川が生還しても戦後に公表される機会はなかったであろうが、習得した作曲技術を駆使した挑戦作で、演奏時間は30分を超える。二つの作品に託された想いや曲調は対照的だが、一人の学生が趣の異なる作品を書くこともある。作品から戦時下の学生像を単純化して断ずることはできない。

(4) 楽譜の浄書、編曲、補作 《かなしひものよ》は、音符や歌詞が薄いため浄書した。《昭南島入城祝歌》は、終わりまで書かれ、一見するとピアノ譜と声楽パートのようだが、ピアノ譜の部分はオーケストラ譜の覚書になっており、オーケストレーションの原型なのである。作曲者の意図するところはかなりの部分、書かれており、これを作曲家・高橋宏治が草川の構想を可能な限り汲み取り、補作とオーケストレーションを行い、スコアを完成させた。



【楽譜 3】《かなしひものよ》浄書



【楽譜 4】《昭南島入城祝歌》
高橋宏治による補作・編曲

(5) 学生数、入隊者数、徴収率、戦没者、入隊後死亡率

【表 1】は、当時の官立高等教育機関で唯一、創立時より男女共学であった東京音楽学校の科別の男女学生数人数比である。ここでは戦時下の学生を、昭和16年12月の対米英開戦から昭和20年8月までの間に学生であった人と暫定した。音楽学校は修業年限が、予科と本科を併せて4年、師範科が3年(途中から4年)である。そこで師範科は昭和14年入学生から20年入学生まで、予科・本科は昭和13年入学生からとなる。

病気や個人都合による休学等でそれ以前に入学した学生も含め、男子は354名であった。

| 学科別 | 入学年度 (昭和) | 男子 | 女子 | 男女計 | 人数比 男子：女子 |
|-------|--------------|------|------|------|--------------|
| 予科・本科 | 13-20 | 172名 | 302名 | 474名 | 36%：64% |
| 甲種師範科 | 14-20 | 146名 | 266名 | 412名 | 35%：65% |

| | | | | | |
|-----|-------|------|------|--------|---------|
| 邦楽科 | 14-20 | 36名 | 129名 | 165名 | 22%：78% |
| 全科 | | 354名 | 697名 | 1,051名 | 34%：66% |

【表1】東京音楽学校の男女生徒

一方、【表2】に見るように、同様の方法で調査を行うと、美術学校生は1266名となった。これは美術学校が男子校であったことに加え、師範科は音楽学校と同様に3年制だが、予科・本科が5年制であった、すなわち在学年数が長いことにもよる。専攻の種類も多く、1学年の人数も音楽より多かった。表は、戦時下東京美術学校の在籍者数、入隊者数、徴集率、入隊後の死亡率を学籍簿に基づきまとめたものである。学生一人ずつ、入学年度、氏名、読み、生年月日、出身地、卒業年度、入退学、兵役・入隊関係、その他参考情報を一覧表にし、そこから集計した。

| 学科別 | 入学年度 (昭和) | 在籍者 A | 入隊者 B | B÷A | 徴集率 | 戦没者 C | C÷B | 入隊後 死亡率 |
|-------|--------------|----------|----------|-------|-----|----------|-------|------------|
| 予科本科 | 12-20 | 1136名 | 507名 | 0.446 | 45% | 77名 | 0.15 | 15% |
| 甲種師範科 | 14-20 | 130名 | 53名 | 0.407 | 41% | 4名 | 0.075 | 7% |
| | | 1266名 | 560名 | 0.442 | 44% | 81名 | 0.144 | 14% |

【表2】東京美術学校の在籍者数、入隊者数等

【表3】は両校の比較である。男子学生数では、美術は音楽の3.6倍であり、従って入隊者も戦没者も美術学校が多い。しかしながら、注目すべきは「入隊後死亡率」である。調査史料が両校で異なるため、必ずしも同一基準による比較はできないのであるが、この部分だけはほぼ同じ数字なのである。しかも、全国の高等学校や大学の多くが5~9%と算出されているのに比べ、両校とも異様に高くなっている。その原因は現段階では不明である。

| 学校名 | 在学者 | 入隊者 | 徴集率 | 戦没者 | 入隊後死亡率 | 典拠史料 |
|--------|-------|------|----------------|-----|----------------|-------------|
| 東京音楽学校 | 354名 | 76名 | 21% (0.214) | 11名 | 14% (0.14) | 願書、成績、入退学書類 |
| 東京美術学校 | 1266名 | 560名 | 44% (0.442) | 81名 | 14% (0.144) | 学籍簿、入学者名簿 |

【表3】東京音楽学校と東京美術学校の入隊者、徴集率等

4. 研究成果

(1) 記録調査 戦時下の学内記録より、生徒の氏名が記される文章を悉皆調査したことで、断片的な記録が一覧でき、想像で語られていた「学徒出陣」の現実が見えてきた。文書の保管状況についても確認することとなった。音楽側の学籍簿は未確認だが、入学願、学期ごとの試験書類、演奏旅行の参加者名簿の他、授業担当表や個人レッスンの受持なども確認することができた。実技教育において師弟関係は重要であり、作曲家の作風や演奏家のレパートリー形成などを理解する手がかりとなる。そこから音楽学生の人物像を描くこともできるようになった。

(2) 記録から見えること 在学中の徴集と入隊後、戦後の情報を収集することは、必然的に戦没者情報を収集することも意味した。現段階では学生の戦没を11名と報告し、彼らについては在学中の各種史料から学生生活の足跡を追い、所属部隊や戦没地を追跡し、当地の戦況なども調査した。ところが最近になってもう一名の戦没情報を得た。東京音楽学校を繰上卒業後、郷里の沖縄師範学校女子部に奉職し、ひめゆり学徒を引率してガス弾に斃れた人物であり、作品も遺されている。今後詳細調査を行ない戦没者に加える予定である。

(3) 楽譜の状態 戦没学生の手稿譜は、形状も状態もまちまちだが、総じて劣化が進んでいる。50曲近い作品群のデジタル化を行った。基本的にはすべての画像を公開する方針である。学習途上の作品群であり、草川宏の《昭南島入城祝歌》を例外として、ピアノ曲、歌曲が最も多く、室内楽が数曲といったところである。作風からは、彼らが学校で教わった技術、恩師の影響、さらにはどのような音楽を聴いて創作の源泉としていたかが想像される。まだ彼らは自身が書きたいものを譜面に全て書き得たかどうか定かではないが、当時の作曲なりに、斬新で冒険的な響きを探し、詩から想像を膨らませ挑戦的な表現も散見される。まだ演奏しやすさや、演奏家の都合を感得し切れていない生硬さもあり、若人の創作として味わい、分析するに十分な内容を湛えている。歴史的な作品として今後、演奏とともに研究、分析されて行くことであろう。

(4) 楽譜の浄書、編曲、補作 楽譜原本の保管は基本だが、これを楽譜作成ソフトで浄書し、データとしておくことは演奏のための実用譜として重要である。演奏に使用する曲から、必要に応じて浄書した。浄書譜を作れば、実際の演奏がされていない作品でも、とりあえず電子音による再生は可能となる。

(5) 学生数、入隊者数、徴集率、戦没者、入隊後死亡率 「学徒出陣」の解明を目的として当時の学生を網羅的に調査したことで、入退学、休学、出身地、出身校などの全容が明らかになって

きた。病気休学、家事都合による休学も目立ち、これまで漠然と把握されていた全校レベルでの在学状況について具体的に辿ることができるようになった。入学年度ごとに学生氏名と各種情報を一覧表とし、新たな情報を入手すれば蓄積できるようにした。在学中の入隊者については一通り調査を終えたとの認識であるが、入隊後の経緯や生死については未解明な部分がある。

(6) 残された作品や史料の伝え方 学生が作曲した作品が残されていることは、音楽学校ゆえの特徴である。作品の存在は、これがなければ学生についても所属や人数でしか記述できないが、作品のおかげで学んでいたこと、志したこと、学生ごとの個性など学生が生きた証を伝える点で強力な手がかりとなる。研究材料ともなろう。彼らの作品は、他のノート類、日記、家族への手紙などととも、アーカイブズとして蓄積される。作品を残さなかった戦没者についても情報を開示していく予定である。

戦没学生の譜面は、譜面のままでは音楽として共有され難い。演奏は必須である。だが演奏しただけでは居合わせた人にしか共有されない。また、作品の評価についても、通常分析から価値を問うには適さないところもある。現時点では人物や作品の存在それ自体を歴史に刻むことが最重要であろう。演奏し、遺族からの情報などを含め、メタデータはできる限り付与し、アーカイブズとして、いつでも、誰でも、どこからでも見て、聴くことのできる環境を整えることが肝要であろう。音楽は絵画とは異なり、物としての譜面を展示しただけでは伝わりにくい代わりに、デジタル化し、史料が見え、音が聞こえるようにすれば、特定の展示館を建築しなくても、ウェブ上で展示し、演奏の映像を流し、研究材料を提供することもできる。本研究はそうした観点から、3年間の研究期間の終了時に、東京藝術大学大学史史料室のウェブサイトに、学生の遺した楽譜と映像等を合わせた専用サイトを開設した。サイトの名称は一般公募により、「声聴館」と名付けられた。命名者は作詞家・保岡直樹氏である。

<https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/>

(7) 「声聴館」の課題にふれる。サイトは立ち上がったが、掲載された作品はまだ一部である。演奏映像や各種史料を追加し、充実を図る。また仮に全作品が掲載されても、生きたサイトであるためには実際の演奏や調査研究の継続が必要である。国際的共有には英語併記も必要である。現在は東京音楽学校の戦没学生に特化しているが、今後この枠組みを緩やかにする計画である。すなわち戦時期に書かれた作品、戦時期の教師や戦死した卒業生、他校の学生の譜面、戦没音楽家についても収録し、さらに戦没者の作品に限定せず戦時下の音楽に広げることで、戦没学生の音楽を歴史的に相対化し、学術研究への寄与を期したい。



【画像1】戦時音楽学生 Web アーカイブズ 「声聴館」トップページ

<https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/>



【画像2】草川宏《昭南島入城祝歌》楽譜を見ながら演奏映像を視聴できる

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ①橋本久美子、東京音楽学校・東京美術学校の「学徒出陣」の実態解明に向けて～記録と記憶によるアーカイブズ構築のために、東京藝術大学音楽学部紀要、査読有、44号、2019、pp.105-121
- ②橋本久美子、戦時下東京音楽学校の記録と記憶のアーカイブ化に向けた試み：「学徒出陣」の調査と戦没学生の作品演奏を事例として、東京藝術大学音楽学部紀要、査読有、43号、2018、pp.65-80

〔学会発表〕(計4件)

- ①橋本久美子、東京音楽学校の「学徒出陣」を現在に伝え、後世につなぐための諸課題、東洋音楽学会第69回大会、大正大学、2018/11/11
- ②橋本久美子、西山伸、折田悦郎、片山杜秀、佐藤道信〔学内開催〕戦没学生のメッセージ、シンポジウム、今「学徒出陣」をどうとらえるか、2018/7/22
- ③橋本久美子、吉見俊也、西山伸、佐藤道信〔学内開催〕戦没学生のメッセージ、シンポジウ

ム、戦時下の東京音楽学校・東京美術学校—アーカイブ構築に向けて、2017/7/30
④橋本久美子、西山伸、東京音楽学校の学徒出陣の記録について—京都大学の事例とあわせて、
日本音楽学会第67回大会、中京大学、2016/11/13

〔その他〕

ホームページ等：戦時音楽学生Webアーカイブズ「声聴館」（2019/4/1開設）
<https://archives.geidai.ac.jp/seichokan/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：西山 伸

ローマ字氏名：NISHIYAMA Shin

所属研究機関名：京都大学

部局名：大学文書館

職名：教授

研究者番号（8桁）：30252406

研究分担者氏名：折田 悦郎

ローマ字氏名：ORITA Etsuro

所属研究機関名：九州大学

部局名：大学文書館

職名：教授

研究者番号（8桁）：10177305

研究分担者氏名：大角 欣矢

ローマ字氏名：OSUMI Kinya

所属研究機関名：東京藝術大学

部局名：音楽学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：90233113

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：大石 泰（東京藝術大学演奏芸術センター）

ローマ字氏名：(OISHI Yutaka)

研究協力者氏名：大河内 文恵（東京藝術大学音楽学部）

ローマ字氏名：(OKOUCHI Fumie)

研究協力者氏名：大西 純子（東京藝術大学美術学部教育資料編纂室）

ローマ字氏名：(ONISHI Junko)

研究協力者氏名：嘉村 哲郎（東京藝術大学芸術情報センター）

ローマ字氏名：(KAMURA Tetsuro)

研究協力者氏名：佐藤 道信（東京藝術大学美術学部）

ローマ字氏名：(SATO Doshin)

研究協力者氏名：澤 和樹（東京藝術大学）

ローマ字氏名：(SAWA Kazuki)

研究協力者氏名：澤原 行正（東京藝術大学音楽学部）

ローマ字氏名：(SAWAHARA Takamasa)

研究協力者氏名：鳥谷部 輝彦（東京藝術大学音楽学部）

ローマ字氏名：(TORIYABE Teruhiko)

研究協力者氏名：永田 英明（東北学院大学）

ローマ字氏名：(NAGATA Hideaki)

研究協力者氏名：吉田 学史（東京藝術大学音楽学部）

ローマ字氏名：(YOSHIDA Gakushi)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。